がれとでもいうべきものが存在している。それは生活様式の相違，生活環境の相違，生活水準の相違などに根ざしていると考えてよいだろう。これらのあこがれのすべてを満足させることは困難としても，それを意識させないようにする配慮が必要であろう。

そのためには，地域を指定し，生活，文化，教育，福祉の部門と生産が，調和のとれた発展をするような総合的な施策が必要である。かくすることにより，近代的な農業がしっかりと根をおろし，住みよい街づくりにも貢献するものと考えられるのである。

<農政局参事・農政課長>

≪コメント≫

都市農業のめざすもの

服部一馬

1――――都市問題としての農業問題

横浜市の農政当局者の執筆になる「大都市問題のなかの農業行政」を一読して，まず強く印象づけられるのは農政当局の苦脳である。というのは戦後20年にわたって多角的に展開されてきた諸施策が，必ずしも所期の成果をあげえていない現状を，当局みずからが認めざるをえなくなっているからである。徳植氏のいわれるように，「農業行政の効果は一朝一夕に現われるものではなく，長期にわたる地味な努力の積み重ねが要求される」面があることはたしかである。しかし，一方では，都市化の進行にともない，農業の環境条件が急速に変化していくことも明らかである。したがって，ある時点において妥当とされた施策が，つぎの時点ではすでに的はずれになるといった事態がしばしば生じるわけである。横浜市の場合には，むしろそうした事態が恒常化しているとみてよかろう。つまり，都市化が急テンポに進行するのに対して，農政はたえず後手にまわることになるのである。では，この現状ははたして打破できないのだろうか。都市化の進行に対応するいわば機動的な農政はありえないのだろうか。

2――――都市農業のビジョン

現在，横浜市の農業が直面している問題は，農業プロパーの問題としてよりは，基本的に都市問題の一環として扱われるべき性格のものである。したがって，市農政の基底には，今後一層はげしい

変貌が予想される横浜の都市構造のなかで，農業が占めるべき位置やその役割について，かなり長期的な構想が必要であろう。この点に関して，徳植氏は「近代的な都市農業を確立し，『田園と結びついた都市の発展』のなかに，農業がその存在価値を誇れるようにしたい」とのべておられる。しかし，農政の目標としては，やや具体性を欠くように思われる。「近代的な都市農業」の内容がいったいどのように構想されているのか，それが「田園と結びついた都市」のなかでどう位置づけられるのかというような点が明確にされていないからである。換言すれば，横浜市の農業について，もっと具体的な将来像がうちだされてよいのではないか。徳植氏は都市農業における前進要因を指摘し，画一的な国の農政からの自立を強調されているが，そうした視点から，市農政の長期的かつ具体的な目標が設定されることを期待したい。そうなれば，実際の施策にあたっての重点のおきどころが容易に決定できるであろうし，また，状況に応じてかなり機動的な施策も可能になると思われる。

3――――実態調査の重要性

ところで，効果的な農業行政を展開していくためには，当然のことながら，その直接の対象となる農家の実態把握が不可欠である。とくに，市内の農家が，現在，農業をとりまく環境条件のはげしい変化にどう対応しているのか，また，それにともなって農家世帯員の農業に対する関心ないし意識がどのように変化しつつあるのかを正しくとらえることは，当面のもっとも緊要な課題といえよう。個別農家の立場に即してみれば，兼業や農地転用等による収益の可能性が増大すればするほど，農業への関心が弱まるのは自然のなりゆきである。横浜市においてこうした傾向がすでにいちじるしく進行していることは，たとえば農協の多くが実質的に市街地の信用組合とひとしい性格のものへと変質し，農業の場における本来の機能を急速に失いつつある事実によっても明らかであろう。したがって，「近代的な都市農業」の発展を期する農政を，市内の農家の間に浸透させることは決して容易ではない。それを軌道に乗せるためには，なによりもまず，農協や農業委員会のいわば事務的な調査の域をこえた周到な実態調査が必要であり，それを通じて，農政の対象として重点をおくべき農家――つまり「近代的な都市農業」のにない手――を確実に掌握すべきであろう。農政のからまわりを防ぐためには，結局，このようにしごく平凡な作業に頼るほかはないと思われるのである。

<横浜市立大学教授>